

自己なるコメと他者なるコメ

近代日本の〈稲作ナシヨナリズム〉試論

山内明美

はじめに

米を主食という言葉は軽々しく用いられているけれども、今も全国を通じて米食率は恐らくは三分の二以内、僅か半世紀以前までは、それが五十%を少し越える程度であり、しかも其の中には都市と工場地、貴族富民其他の非農民階級の、米しか食わぬ者の多数を包含して居た。主として貧窮の爲、年貢の過酷だった爲と、解せられたものにも根拠はあるが、今一つの理由は、是が本来は晴れの日の食物であつたことで、年に幾度の節日祭日、もしくは親の日身祝ひ日だけに、飽くまでそれを飲み食ひして、身も心も新たにしようといふ趣旨

が、古くからついて廻って居たことは、決して水田に乏しい地方だけに限らなかつたのである^①。

一九五二（昭和二七）年、柳田国男は『海上の道』で、このように論じていた。外地米に依存していた帝國主義時代が終焉をむかえ、闇市が跋扈し、国内の米が極度に不足していた時代である。日本は、いまだアジアの途上国であつた。

「一国民俗学」の終着点とも位置づけられた本論考は、南方から海的路を渡って稲を携えてきた「日本人」が、信仰としての稲作を伝播していったという仮説に基づいていた。しかし、当

時の生活実感の中で、国民すべてが常食としてコメを食べていたという議論をすることは不可能であった。敗戦以後、国内の米穀生産が、需要を完全に満たせるようになったのは一九六〇年代も半ばに入ってからのことである。それ以前の日本は、恒常的に米不足であり、植民地や海外からの輸入米に依存していた。

柳田は、稲作を信仰する人々（常民）による、ひとつの宗教共同体^②をもって、この国のナシヨナリテイ（国民国家像）を構想していた。彼の思想的出発点が、「経世済民」であったことを考えるならば、都市と農村の経済格差の激しい時代において、国内を稲作の豊かさに潤すことは、ごく自然な希求でもあった。だからこそ、歴史の中で「日本人は稲を信仰した民族である」という思想を、柳田は論じたのだ。柳田の構想は、同時代の社会格差が産み落としたナシヨナリズムのひとつの現れである。

〈稲作ナシヨナリズム〉の定義

ある特定の民族や国家が、その集団の象徴やアイデンティティとして、ある特定の植物との結びつきを主張するという態度は、日本のみならず世界のかなり広範囲にわたって見られる現象である^③。本論では、「日本人」は稲（あるいはコメ）を信

仰してきた」あるいは「日本人」は米を主食としてきた」と語ること、それ自体を〈稲作ナシヨナリズム〉と定義している。とりわけ、近代における日本人の稲作や米食へ対する志向は、しばしば「米食悲願民族^④」と呼ばれてきた。ここでは、特定の食物に対する、特定の民族や国家における極めて複雑なヘゲモニーが介在している。

もっと言えば、資本主義をはじめとする「近代のシステム」と世俗化した「稲の信仰」の論理が絡み合っ て現れたのが、近代日本の〈稲作ナシヨナリズム〉なのである。近代国家が標榜した神話の中の「瑞穂國」という国是は、グローバル経済と結合しながら、内にあっての地方、外にあっての植民地にどのように作用していったのであろうか。

問いの設定

本論は、日本人論や日本文化論などでくり返し語られてきた稲作とナシヨナリズムをめぐる言説研究である。いったい、日本人にとって稲やコメとは何だったのであろうか。「稲作民族」や「稲作文化」を語ることが、この国の単一民族神話とつねに相互補充の関係にあったことは、一九九〇年代以降、くり返し指摘されてきたことであつた^⑤。

周知のように天皇は、稲をつかさどる祭祀者としての役割を、

現在でも担っている。しかし、王政復古後の近代日本において、軍服を着用しはじめた天皇が稲のシャーマンであるということ、を、いったいどれだけの国民が認識していたのだろうか。言うまでもなく、国民国家形成の産物として天皇と稲の儀礼は、「伝統の創造」^⑥というページェント^⑦を発明してきたにすぎない。明治以降の富国強兵政策の中で、コメ作りは、この国の食糧問題を担っていたからである。

もっとも、人類学者大貫恵美子が指摘しているように、権力者がある目的のために特定の象徴の普及をはかり、それを人びとが盲目的に受容したという議論はもはや説得力を失っている^⑧。誤解を避けるために言えば、「創られた伝統」は、歴史的、文化的タームから切り離された議論ではない。ここで「天皇による稲作儀礼は「伝統の創造」である」と言ったとき、それは近代になって新しい儀礼として創出されたという意味では決してない。ここでは、ある特定の階級や地域の儀礼が、あらかも普遍的に執り行われてきたかのように国家レヴェルで語られるようになったことを意味している。そしてある民族や国家が、それ以前には取り立てて意識されていなかった慣習を「伝統」として言挙げするときには、つねに他者を必要とする、という点に留意しなければならない。すなわち、近代天皇制は、西洋の君主制への対抗概念として再認識された制度であった。

そして、大嘗祭、新嘗祭といった天皇による稲作儀礼もまた、近世までは神仏習合的な儀礼体系であったものが、神道風にアレンジされ「伝統」として位置づけられたのである^⑨。

「日本人」と稲作文化の歴史的な関わりを、例えば柳田国男は、民間伝承の中の稲作農耕儀礼に求め、折口信夫は大嘗祭や新嘗祭といった天皇儀礼を通して論じていた。両者の主張は、天皇と国民を「稲作」という文化装置で統合させ、近代国家に血肉を与えていった^⑩。柳田は、新しい国学としての「一国民俗学」^⑪を構想し、折口は天皇の身体に「稲魂」^⑫を見いだした。ただし、近代日本における〈稲作ナシヨナリズム〉の発現を、「民俗学」という特定の学問分野に集約すればこと足りるといふことでは、決してない。

ナシヨナリズムの勃興要因は、きわめて多様であり、その本質的特徴を定義できるような理論が存在するわけではない^⑬。アーネスト・ゲルナーは、民族におけるアイデンティティの問題について、暗黙の自己同一化は、あらゆる集団づくりのために機能してきたが、そのような意志が民族の基礎であるという定義が魅力的に見えるのは、近代ナシヨナリズムの時代にとって、民族単位がアイデンティティと自発的な忠誠心にとってのお気に入りの対象だからにすぎないと論じ、また産業社会の文化は、信仰の運び人あるいは信仰のほとんど認知されない付属

物としてではなく、文化として維持されることを求めるとい
う⁽⁹⁾。

本論では、とくに明治以後の外国米（南京米、朝鮮米、台湾
米など）へ対する「日本人」の葛藤、および国内における東北
地方への稲作の波及をナショナルリズムの問題とともに考察する。

南京米と日本人

万朝報の記者であった茅原崋山は、一九一二（大正一）年八
月に「南京米と日本人」と題する時事評論を書いている。

日本人は外人といへば必ず之を敵視するの心が浮かんで来
る、「今に見ろ」という心で、兵法を国交際に応用し、謙讓
抑損、意識的若しくは無意識的に彼を油断させるのである。

〔……〕日本人の弱点は南京米で尽く暴露した。南京米の言
葉が一番其感触を害す、イヤ是れは西貢米で南京米ではない
といふと聊か面目を保つやうな心地がするやうだ、外国米と
いへば一層善い、外国米を買ひに行くに覆面して居るもの、
袖で顔を隠して居るもの、夜中銭を袋に入れて、手だけを
出して外国米を下さいといふものがあつた、米屋の話に依れ
ば、此米には南京米が入っていますといふと機嫌が悪るい、
此れは日本米ですが、今では外国米の入つて居らぬ米はない

といへば別に機嫌を損ぜぬそうだ⁽¹⁰⁾。

ここに、「日本米」を頂点とする、強烈なコメのヒエラルキ
ーが存在していたことがわかる。茅原の記事には四つのコメが
出てくる。すなわち南京米、西貢（サイゴン）米、日本米そし
て外国米である。これを記事にしたがって順位をつければ、日
本米√外国米√西貢米√南京米となるだろうか。こと南京米に
対する差別意識はきわめて強いものであつた。コメの味の違
いにもよるであろうが、日清戦争、韓国併合を終た内地人の植
民地へ対する自意識は、食べ物への差別感にもっとも顕著に現
れている。外国米を買いに米屋へ行く人々の姿には、日本米を
買えないことへの屈辱感さえ漂っている。

南京米に対する庶民の心情は、夏目漱石の『抗夫』にも読み
とることができる。夏目は、一九〇八（明治四一）年元旦から
四月六日まで、九十一回にわたつて『東京朝日』、『大阪朝日』
に「抗夫」を連載した⁽¹¹⁾。当時、外国から輸入した多くのコメ
が、炭坑へ運び込まれていた。

東京から「炭坑」へ働きに来た主人公の青年は、自分をから
かう抗夫共に「銅山を出れば、世間が相手にして呉ない返報に、
たまたま普通の人間が銅山の中へ迷ひ込んで来たのを、これ幸
いと嘲弄するのである」と語る⁽¹²⁾。このような抗夫たちが日々

食べているコメは「南京米」で、寢床には始終「南京虫」がわいているのである。ここでは、抗夫が位置づけられている社会的階層と、「悪米」とさえ呼ばれていた南京米への意識が重層的に描かれている。

植民地のコメ

一九一八（大正七）年の米騒動を契機として、日本政府は朝鮮、台湾における内地品種の栽培と移入増産をはかった。『朝鮮米穀要覧』によれば、一九二〇年には百七十五万石であった内地への移入量は、翌年には三百八万石へと倍増、暫時段階的に増加し一九三〇年には五百四十三万石に達している。戦時中の日本内地の米消費量のほぼ半分が、外地からの移入米であったことを、現在知る人はほとんどいないであろう。内地産米は高価で嗜好品に近い高値で取引されていたため、都市労働者の多くは朝鮮米や台湾米を常食としていたのである。

それ以前には、例えば、明治四三年に出版された主食米の新調理法の案内には、コメが高くして生活難の時代であるために、外国米^⑧を用いることが奨励されている。そこでは、外国米七合と糯米三合は、国産三等米を食べるのと少しも変わらないとされ、安い米を美味しく食べられる方法が考案されていた。明治四〇年頃の外国米と国内三等産を一合あたりの価格に換算す

ると、外国米が一錢八厘で国内産三等米が二錢八厘であるから、国産米はほぼ倍の価格であったことが分かる^⑨。もっとも、この価格の差から推測することができるように、外地米はその食味の違いから、概して人気がなかった。米騒動以前は、台湾や朝鮮での稲作は現地品種が主であり、台湾などは内地品種の蓬莱米が栽培される以前は、長粒種であるインディカ米が移入され「粗悪なコメ」とされていたのである。

しかし、朝鮮や台湾での内地品種の栽培によって、内地米と食味がさほど変らないという評価とともに、新しい問題を引き起こしてゆく。近代の市場原理は、内地の農民と外地の農民との経済競争を表面化させていたのである。内地の地方農村における農民の貧困が深刻な社会問題になり滿蒙開拓移民が取り沙汰されていた一方で、安価な外地米の大量移入は、内地と外地での減反政策が議論されるほどに複雑な状況になっていた。さらに、このようなコメの経済摩擦を引き起こしていたのは、植民地に進出していった内地の地主層であった。彼らは内地に広大な田んぼを所有しながら、さらに帝国を渡り歩くコメの支配者でもあった。

このような植民地米の移入に対して、敏感な反応を示していた知識人のひとり、農政官僚でもあった柳田国男である。柳田は「日本人」の *right* の問題として「稲作共同体」を構想

した人物であるが、彼は一九三一（昭和六）年に書いた『明治大正史 世相編』で、次のように外地米について言及していた。

第一に米の消費量が、以前は今日のように多くなかった。

稻を栽培しなかつた土地はすでに弘く、米は通例城下と湊町とにより他へは、輸送せらるる途がつかないなかつたのである。畠場や山間でこれを常食にし供し得なかつたのはもちろん、田を耕す村々でも米の飯は終始控え目であつた。明治二十何年ごろにドイツ人エッケルトが、政府のために調査をした際には、米は全国を平均して、全食料の五割一分内外を占めて居るといつた。兵士その他の町の慣習を持ち還る者が多くなるとともに、米を食う割合は次第に増すことであろうと説いて居る。その予言が確かに適中した。兵營は夙く脚氣病の予防などのために、挽割りの麦を混食させる方針を採つたにもかかわらず、一般にその混用の歩合が少なくなり、目に見えて飯は白くなったのである。米しか食わない人の数がまた激増して、粗悪な外国米が山奥にも運び入れられることになつた。この変化の方が実は精白度よりも大きなことである。米は日本人の主食物であるということを通じて疑われない人は以前から相応にあつた。そういう人たちはばかりが、日本の生活問題を論じようとしたこと、それと一方には米の飯は奢り

であり、したごうて米が食えるのは幸福だと思ふような、質朴なる考えとが合体して、始終注意をこの一点に集め、非常にわれわれの食料問題を窮屈にしたことは事実である²⁰。

小熊英二は『単一民族神話の起源』において、「彼（柳田——引用者注）は当時の帝国の論壇の大勢とは逆に、混合民族論から単一民族論（に指向として近いもの）に転向した珍しい論者」であると指摘している。たとえば喜田貞吉などは朝鮮における三・一運動前後から民俗学を含めた混合民族論を展開させていたのに対し、柳田は山人論を棄ててしまったと語られている。『遠野物語』から一九一〇年代までの柳田の中核概念であつた「山人論」について、「（柳田によれば——引用者注）コメは山人の大好物であり、彼らは握り飯や餅で仕事に雇われ、コメほしさに平地民と交流し、やがて同化されていったとされた。柳田がのちに日本文化の根源として描いてゆく「米の力」は、まず先住民を同化する力として語られたのである。」と小熊は指摘している²¹。

三・一運動は、一九一九年におこつた朝鮮の独立運動である。日本内地では、この前年全国各地で「米騒動」が引きおこされた。この民衆暴動は、軍隊を動員するほどの勢いで広がり、時の寺内正毅内閣は総辭職に追い込まれた。寺内は初代朝鮮総督

でもあった。内地での「米騒動」は、結果的に、朝鮮や台湾における産米増殖計画を誘因することとなり、三・一運動の時期には東洋拓殖会社のような国策会社が、朝鮮半島の農地を膨大に収奪していたのである。

柳田は、米の交易が隆盛することによって、人びとが米に満たされる幸福感に安んじて、逆に米が粗略に扱われることを嘆いていた。彼の外米移入に対する反応もきわめて敏感である。さらに、内地の側からみれば、柳田の思想基盤が「経世済民」であったことを考慮するならば、植民地米の脅威が、内地の農民に対しては地方農村におおきな打撃を与えることをすでに予測していたというべきであろうか。柳田の「米の宗教的価値」に見いだしていたロジックは、きわめて逆説的である。彼は、米の不足とその物珍しさの中にこそ、「米を信仰する人びと」の本質を見いだしていた。柳田にとっての「コメ」とは、まさに民族の問題であった。

明治以来の文化統一と、近代がもたらしたグローバル経済は、急速に内地に住む「日本人」のインフラを整えていった。そのもっとも大きな変化が、実は、米の単食だったのである。

しかし、大量の移入米によって支えられていた帝国の食糧依存体制は、敗戦を迎え植民地を失うことによって、崩壊した。そしてやがて、かつての植民地にかわって昭和時代の食糧供給

の場へと変貌をとげたのが、「東北」である。

社会格差——東北地方とコメ

富国強兵政策がしかれた近代国家創設期において、例えば福沢諭吉なども米食の問題にたびたび言及しているが、以前には稼の実、稗、粟の類を常食とした人びとが、白米を食べるようになったことを時代の大きな変化として受け止めていた。このような生活の度を高めていたのは外国からの輸入によるものであるとして「食料たる米をはじめとして日常衣食住の必需品も国内の産物のみにては需要を充たすを得ず、其不足を外国に仰ぎつつ年々輸入額次第に増加の有様なりと云ふ」と書いている。そして、福沢は、日本の農業は、増加の一途をたどる国内人口を支えることができず、衣食住の一切を外国から輸入し、商工立国にする決心をするべきだ、という主張すらしていた。

先に柳田が、粗悪な外国米が山奥に運び込まれていることの変化に反応しているように、それ以前には福沢も、貿易による米食事情の大きな変化を嗅ぎ取っている。ここで、注目したいのは、海外からの輸入によって、国内の生活状況にもっとも大きな影響を与えたのがコメの単食の普及だったという点である。日本人の多くが常食としてコメを食べるようになったのは、海

外からの外米が輸入されるようになってからのことであつた、
という不思議な現象を見過ごすことはできない。

近代国家形成期のグローバル経済は、確実に国内のインフラ
に变革をもたらしていった。しかし、このことは結果的に、依
然としてコメを常食としない人びとの存在を、より際立たせる
ということにもなった。すなわち、米穀と雑穀に象徴されるよ
うな都市と農村の格差、一方で都市内部では日本米と植民地米
に象徴されるような資本家階級と労働者階級の格差である。ま
た対外的には内地の「日本人」の食味に合わないインディカ米
は粗悪な輸入米とされ、「日本人」のコメへの自意識を高めて
ゆくことにもなっていたのである。

福島県出身の実業家半谷清寿によって『将来之東北』^②が出
版されたのは一九〇六（明治三九）年である。ここに寄稿した
新渡戸稻造の序論は、後に「東北稲作不適地論」として知られ
ることとなった。新渡戸は、ここで日本の能登半島より伊豆半
島に一線を引いて、それよりも北の地域で稲作を行うことは危
険であると論じた。「関東以北は自然的米作地にはあらず」と
いう彼の論調は、札幌農学校における西洋志向^③の農業教育を
受けてきた影響もあるうが、稲作の極めて困難だった南部藩に
生まれた新渡戸^④は、北国の稲作の難しさを実感として知って
いたのである。

都市と地方の格差が深刻化する中、東北地方は国内でもっと
も貧しい地方であるとの認識がなされていた。近代日本の東北
開発の研究で知られる岩本由輝は「半谷清寿や新渡戸稻造の東
北稲作不適地論の主張があつても、いわゆる寄生地主制のもと
において東北の水稲単作地帯化はさらに進むことになる。そう
なることが東北の東北たるゆえんでもあつたのである」^⑤と論
じている。前述したように、都市におけるコメの単食が急速に
進む中、近代資本主義の流通ネットワークが地方へ波及し、コ
メは地主にとって極めて有利な商品作物となつていった。しか
し、寒冷地稲作の度重なる凶作は、近代化を目指す東北地方の
いたるところで「貧困」という社会問題を引き起こしていた。
それは、半谷や新渡戸をして、農業をやめて工業化すると言わ
しめるほどの深刻な闇だったのである。

稲作に適さない気候条件の中で東北地方が穀倉地帯化するこ
とは、すなわち、低開発化を意味していた。東北地方は中央と
地続きでありながら、国内植民地とも言うべき認識がなされて
いたのである。明治の人々にとって、「朝敵」「賊軍」といった
戊辰戦争の記憶は依然として新しいものであつた。『将来之東
北』に寄稿している相馬良子（黒光）^⑥は、新宿中村屋の創設
者であるが、同時代の東北地方を「日本の朝鮮」であるとして、
次のように論じている。

東北出身の一青年故鼎軒田口先生^⑧を訪ふて大に朝鮮問題を論ず。談隅々東北の事に及ぶや先生曰く、君等朝鮮国を以て亡国の民となせど東北は即ち日本の朝鮮ならずやと。当時之を伝聞して我も憤慨せし一人なりしが先生の此言たるや実に東北を露骨に説明し得て余蘊なしと謂ふべし。思へば我東北は凡ての点に於いて如何に能く朝鮮国に酷似せるよ。亡国民として欠くべからざる資格は悉く具備し不精、怠惰、無氣力、卑屈、因循等の忌々しき文字は特に我が東北及び朝鮮のために造られたものにあらざるか。思ひ一度茲に至れば無念の涙おのづから滂沱たるを禁ずる能はざるなり^⑨。

東北へ対する、このような見方は東北出身者である相馬黒光だけでなく、同時代の日本社会の中でも、新聞や雑誌の中に極めて多く散見される論調である^⑩。地方が、資本主義の流れに乗り遅れていたのではなく、資本主義時代のグローバル経済が地方へ波及したからこそ、物資が流出し、安価な労働力がスポイルされていったのである。

東北地方の後進性は、一九五〇年代の資本主義論争において、しばしば発展段階論による規定を受けてきた。そのような中では、寄生地主制が、封建時代の残滓として残っていたために、

東北地方は段階的に遅れている、という議論が大勢を占めていた^⑪。しかし、そのような観点の中では、東北地方の急速な稲作化が近代の現象であることは、ほとんど指摘されていない。

また、東北地方の民度が植民地と同じであるという差別的な論調が繰り返し語られたとしても、ここがプランテーションと同一のものであるということを明確に語った論客はいない。「常食としてのコメは奢り」だという観念は、大規模な開拓事業によって広がってゆく田んぼの風景の中に、豊かさの象徴を見いだしていた。途上国でコーヒーやバナナの農園が広がっている風景と、東北地方にモノカルチャーとしての田んぼが広がってゆく風景は、実はそれほど違いがない。しかし、近代日本を覆っていた「日本人」とコメの「所与の関係」は、国内における東北地方の植民地的性格を、国民という想像の共同体の中に覆い隠していた。

貧困の発見

一九一六（大正五）年、十七歳だった中條百合子は、中央公論に『貧しき人びとの群』^⑫と題する小説を発表し、プロレタリア文学の旗手として文壇に登場した。後に宮本顕治の妻となつた宮本百合子である。百合子の『貧しき人びとの群』は、安積疎水事業の功労者として知られる祖父中条政恒がモデルとし

て登場する。米沢（現在の山形）藩士であった政恒は、明治九年の天皇の東北巡幸の際、大久保利通を説得して安積開拓を実現させた。現在の郡山に広がる原野の開拓を決意させた政恒の

奉答文には民の生活が「窮閥敗屋牛馬ト寝ヲ同ジクシ以テ苟モ活スルノミ、殆ド人類ノ養ヒ非ザルナリ」と書かれていた。大規模な開拓事業は、明治維新によって職を失った士族を入植させ、同時に東北開拓も視野に入れた一大国営事業であった。疎水事業に関わった士族は、高知、松山、久留米、鳥取、岡山など全国各地から入植している。福島県中通りの猪苗代湖から郡山に至る延長五十二キロの幹線と七十八キロの分水路をもつ安積疎水は、延べ八十万人を動員し、明治一五年に完成した。そして、郡山の原野は、広大な水田地帯へと変貌をとげたのである。

だがしかし、百合子の小説に描かれた入植者のその後は、極めて悲惨なものであった。彼らの多くは下級武士であり、新開地の収穫量は極端に低かったため、その生活は困難を極め、借金を抱え小作人に転落する者が続出したのである。明治末年までには、入植者の八〇%もの人びとがこの開拓地から転出してしまっている^⑧。政恒の孫娘だった百合子が、プロレタリア文学へと歩を進めてゆく経緯には、安積疎水事業の悲惨な結末に対して、深刻な懷疑を抱いたからに他ならなかった。宮本百合子

の『貧しき人びとの群』は赤裸々に、開拓村の現実を語っている。

私は、自分の生活の改革が、非常に必要であるのを感じた。そして、いろいろな思いに満たされながら、自分の今日までの境遇を顧みたのである。私共の先代は、このK村の開拓者であった。首都から百里以上も隔り、山々に取り囲まれた小村は、同じ福島県に属している村落の中でも貧しい部に入っている。明治初年に、私共の祖父が自分の半生を捧げて、開墾したこの新開地は、諸国からの移住民で、一村を作られたのである。南の者も、北の者も新しく開けた土地という名に誘惑されて、幸福を夢想しながら、故国を去って集って来た。けれども、ここでも哀れな彼等は、思うような成功が出来ないばかりか、前よりも、ひどい苦勞をしなければならなくなっても、そのときはもう年も取り、よそに移る勇氣も失せて仕方なし町の小作の一生を終るのである。それ故彼等は昔も今も相変らず貧しい^⑨。

一八七六（明治九）年に政府は華族・士族へ対する家禄を全廃した。士族反乱の要因ともなった秩禄処分である。救済策として、士族授産のために展開された官営事業は一万九千人の旧

士族を原野の開墾に就かせるが、宮本百合子の小説に現れているように、彼らが対峙した現実には極めて過酷なものであった。士族が、開拓地での農業に適應できないという以前に、その気候条件や土壌の質によって、稲作はおろか、畑作でさえ困難な場所も少なくはなかった。

全国各地に展開された開拓事業のうち、最も成功したと語られたのが、先に述べた安積開拓であった。しかし、農業技術の進歩が不十分な明治の開墾期には、たとえ入植したとしても短期間で、転出者が続出するという状況であった^⑧。また、前述した新渡戸稲造の郷里でも、旧南部藩の広大な原野であった三本木原の開拓事業が行われている。北海道開拓をはじめ、明治期に行われた士族授産のための開拓事業の多くは、近世には開墾の難しかった原野を切り開く作業であったが、その事業は困難を極め、生活苦によって小作に転じる旧士族が後を断たなかつた。

日本米——内なる辺境／外なる辺境

東京帝大の経済学者であった東畑精一は、一九三九（昭和一四）年雑誌『中央公論』十一月号に日本人における「日本米」の意識について、次のように論じていた。

僕らが毎日米、米と云っている米は決して米一般ではなくて正に日本米なのである。「米」の論は実は「日本米」の論なのだ。日本人は米を喰ひたいのではなく日本米を喰ひたくて之に執着している。その意味の窮屈さや非融通性がある。そのため日本の国土内でこの国民的要求を満足せしめるやうに長い間に渡って努力せられて、今日では日本米は全く自給の域に達している。また反対に日本米は外国に向かって輸出せられることもない。仮令あつても日本米を喰ひたい在外邦人のところに行くのではないかと思ふ。そんな訳で日本米ほど国際的性質の乏しいものはない。此では米国どころか世界が我が関せずと薦と映る。世界には実に数多の商品の種類があるが、産額、重要等から云って日本米ほどの大量商品がこの様にまで見事に国際関係から遮断せられているものが他にあらうか^⑨。

ここで、東畑が「日本米」と表現している中には、植民地米——すなわち朝鮮と台湾から移入した内地品種米が含まれている。先にも述べたように「外国米の日本米化」^⑩が急速に進んだのは、一九一八（大正七）年に起こった米騒動を契機としている。全国百万人規模に展開された米騒動が、同時代の労働運動と結びつくのを恐れた政府は、一九二〇年より植民地におけ

る産米増殖計画に乗り出した。この計画は、一九二〇年から三四年までの十五年間に四十三万町歩の土地改良を行い、九百二十万石の増産をはかるものであった^⑧。

東畑によれば、日本米に対する執着心と国防不安によって「朝鮮の在来米が棄てられて内地米、ことに気象状態のよく似ている東北から優良品種が普及して今では完全に内鮮一如が実現した^⑨」と語られている。すなわち、朝鮮半島と気候条件の比較的似ている内地の東北地方の間で農業技術の共有が行われ

	1938年の収量	5年平均収量
内地	65,869	61,765
東 北	10,890	8,908
山陰山陽	6,839	6,480
四 国	3,036	2,897
九 州	10,496	9,201
朝鮮	24,139	20,990
台湾	8,962	9,268
蓬 萊 米	4,612	4,622
合 計	98,970	92,023

東畑精一『米』昭和17年 中央公論社
14頁より一部抜粋

ていた。しかし、台湾や朝鮮で、内地の品種を栽培するという論理は、現地の人々に「日本語」を強制したのと同じ論理で行われていた。ある地域に慣習として伝えられてきた農耕形態が変容することは、村落共同体のあり方そのものを本質的に変容させてゆくはずである。土地収奪によって零落していった農民たちは、生活基盤を喪失し火田民になったり、満州や日本への移住を余儀なくされたものもいた。そして、植民地における、このような村落の「文化収奪」ともおぼしき状況をつくり出していたことに、おそらくただ一人、柳田国男だけは気がついていたはずである^⑩。

上の表からわかるように、植民地時代の生産量は朝鮮が最も多く、東北地方の生産量は九州とほぼかわらない、そして次いで多いのが台湾である。東北地方は土地面積が広いとはいえず、寒冷な気候条件からすれば驚異的な収穫量である。このような地域が、一年に二度収穫できるような暖かい九州地方にまさる収穫量を得られるようになったのは、近代以後のことである。

昭和とコメ

橋川文三は、一九三〇年代のファシズムの勃興について、興味深い試論を遺している^⑪。橋川によれば、二・二六事件をはじめとする、いわゆる「昭和維新」は、二〇世紀初頭の帝国主

義の潮流に対する日本人の初心の精神的反応を起源とするものである、というものであった。帝国主義という「二〇世紀の怪物」に直面した日本人の意識について、橋川は、ほんやりとつぶやくように論じている。

何かが、この時期に巨大なかげりのようなものとして日本人の心の上を横切り、それ以前とは異なった精神状態に日本人をひきいたのではなからうかという印象を私は抱いている。精神的な大亀裂に似たものがあつたのではないか、そしてそれ以来、日本人はそのことに気づかないまま、不思議な欲望に次々と操られ始めたのではないだろうかというような感想である⁽²⁰⁾。

この「二〇世紀の怪物」への不安へ対峙するために、人びとは「昭和維新」と呼ばれる思想や運動を進めることになる。この「維新」は、「失われた日本」、「原始の日本」の探求という性格を強くおびていた。橋川は、「維新運動の思想を考える場合に必要対象を提示する巨人のひとり」として柳田国男をあげている。

橋川文三が『昭和維新試論』で論じていた「精神的な大亀裂」とは、「国民すべてが、常食としてコメを食べること」に

象徴されるような、奢りに似た何かではなからうか。その「見えない力」は確実に地方社会へ広がって行ったのである。柳田が語っていた「コメは奢りである」という言葉は重い。奢りという言葉の意味は、アンビヴァレントである。贅沢である、豊かであるという言葉の裏に、戒めがつきまとう。

さて、コメが食べられることと、それを戒める気持ちの葛藤に引き裂かれていたのは、何も柳田ばかりではなかった。石原莞爾は一九四四（昭和一九）年『農村改新要綱』の中で、次のように稲作について論じている。本要綱は、石原の「昭和維新論」の構想の一部でもあるが、石原は、国民の主食、特に白米の優越を是正しなければならぬとしていた。

米は古来日本人の常食である。我等の祖先は米を食し、米を醸した酒を嗜んで民族の伝統を培って来た。一般通念として存在することのような誤解は、食糧改革を甚だしく阻害するものである。そもそも常食とは何であるか。常食とは国民の大部分が歴史的にその肉体を培うに貢献せる食糧をいひ、農業に誤れる人為の加へられる以前には、その地方の農業条件が最も自然に成育せしむるものから得られた。この意味からすれば、米、特に白米は必ずしも日本国民の常食と呼ばれる資格を与うものではない。日本食糧史を顧みれば、過去三千

年日本国民の主食たりしものは、むしろ米以外の穀物と蔬菜類であり、祖国の国防と生産を直接擔當せるは、極めて最近に至るまで概ね米食者以外の国民であった。米食が広く国民の食膳を支配されるは、近々第一次欧州大戦以後——日本資本主義の躍進とデモクラシー思想の急激なる普及が想起される——のことに過ぎぬ。

石原は、国民の米食が進んだ理由を、資本主義とデモクラシーの思想にあることを、ここですでに指摘していた。自ら田畑を耕し、簡素な生活を心情としていた石原にとって、白いコメの飯を常食として食べられるということそれ自体が、煩惱に近い奢りであったかもしれない。そのような社会になったのは、彼にいわせれば資本主義とデモクラシーによる弊害であった。そして、「農業に誤れる人為」が加えられたため、日本国民の常食がコメになっていったと論じている。もっとも、一九四四年という同時代の状況を考えれば、米食に執着できるような現実には、もとよりなかった。敗戦前年のもっとも戦況が厳しい時期に、農本主義的側面を持ち合せた石原をして「今や日本国民は、米食に結びつけられた空虚なる誇りと尊貴の概念を棄て、米食にたいする異常なる嗜好と執着を矯正せねばならぬ」ということばも、どこか違和感をおぼえる。

一戦時下の食糧事情は、いうまでもなく配給制がしかれていたわけだが、農村における食糧供給率は、平時の四割減という深刻なものだった。銃後の農村は、働き手である成人男性が大量動員によって流出し、生産資材の一切が軍需工場生産に向けられたため、肥料はおろか、農機具や農薬、牛馬までもが極度に制限されていた。そのような農村状況の中で、食糧を満足に供給することは不可能であった。また、山口弥一郎の『東北の焼畑慣行』によれば、標高五百メートル以上の高地で、傾斜十五度以下の平坦地が五十町歩集まるところを「高原開発適地」定め、六十一万町歩が算出され、焼畑による麦、玉蜀黍、粟、稗、蕎麦、馬鈴薯などの増産が進められた。また、「財団法人高原地開発協会」が発足し、東北地方の開発されていない高地十四万町歩と東京周辺の未開発高原十六万町歩とともに、焼畑計画が発表されている³⁾。生産資材が極端に制限されていた非常時の農業は、石原の言う自然条件に合う農業を志向させていた。それは、東北地方で行われているような、近代の技術を必要とする稲作とは別のものであった。また付け加えれば、このような高原開発は、焼畑に限ったものではなく、満州への移民訓練を内地高原で行うことも唱えられていた⁴⁾。

むすびにかえて——歴史的象徴としての「稲作農耕民」

稲作を担ってきたのは言うまでもなく〈農民〉である。ここへ〈 〉をつけたのは以下のようなネグリの定義による。

農民という形象はマルチチユードの概念にとって最大の難問となる可能性がある。というのも、農民を産業者階級やその他の外部に位置づけ、質的にも異なるものとしてきたこれまでの経済史・文化史・政治史の重みはあまりに大きいからだ。実際、農民や農村といったものは何百年、いや何千年も変わっていないと考えられることは珍しくない。土を耕し農産物を生産して大地と密接に関わりながら生きる農民の姿ほど、人類にとって永続的で基本的なものがあるだろうか？ここではっきりさせておくべきなのは、すべての農業者が農民ではないということだ。農民とはある特定の方法によって土を耕し、ある特定の社会関係の集合のなかで農作物を生産する歴史的形象を指す⁽⁵⁾。

経済史をはじめとする、歴史記述の中で〈農民〉という存在はいつも労働者とは区別されて描かれてきた。ネグリの議論では、歴史的形象であった〈農民〉とは、自給自足でできる小土地所有の「中農」として論じられている（この点は柳田国男における「常民」を想定することが可能である）。このような中農

は、領主（資本家）と区別がつかないような富農と労働者として農業を担う貧農に分裂し、先進国においてはすでに大多数が姿を消しつつある。歴史的形象としての〈農民〉階級はある時点で発生し、いつかは消滅する存在なのだ、とネグリは論じている。ただし、ここで〈農民〉が消滅するというのは、農業者がいなくなるということではなく、農民が労働者と区別されなくなるという意味においてである。先の柳田の議論から言えば、村落共同体において、土地を所有しながら古くからの習俗を継承してきた人びとをここでは〈農民〉と定義しているのである。さて、日本における歴史的形象としての〈農民〉は、稲作農耕民であると位置づけられてきた。たとえば人類学者石田英一郎は『日本文化論』で、次のように論じていた。

日本人ないし日本民族の核心となって、民族が民族として存続するかぎり、容易にはかわりえない民族の個性が形成されたのは、大陸文明を輸入する以前、あるいは国家統一前の弥生時代の稲作農耕民の生活のなから生まれたものである。うと私は考えています。〔……〕日本人の民族性、国民性を議論する場合に、国民性の原型といったものを、まず農民のパーソナリティのなかに求めるといった考え方が一般的です⁽⁶⁾。

石田の議論にみられるような、日本人と稲との結びつきを論じた文献はきわめて多い。しかし、石田がこのように論じていた一九六九（昭和四四）年において、すでに圧倒的に資本主義の波にさらされていた日本社会の中で、「民族性」とか「国民の原型」といったものを、いかにして農民の中に求められるのかは心許ない。

結論めいたことを言ってしまうば、日本における〈稲作ナシヨナリズム〉の発現は、資本主義時代の地域間交流——つまり、グローバルリズムと表裏をなしている。戦前における米食の普及が、海外からの輸入米によって実現したことは、示唆的である。そして、上述した石田の議論があった一九六九年に日本の農村がおかれていた状況は、コメ余りによる減反政策への直面という、歴史上はじめての経験であった^④。このような同時代的状況は、続く七〇年代にかけて「日本人」とコメの関わりの中に、過剰なほどの意味を見いだしてゆくことになった。たとえ

ば、柳田ブームを再燃させた吉本隆明の『共同幻想論』を思い浮かべることが出来るだろうか^⑤。

さて、本論では近代日本における〈稲作ナシヨナリズム〉の試論として、植民地と内地の東北地方における「稲作」について短く論じた。しかし、稲作に関する膨大な文献が存在する中で、「日本人」とコメの関わりについて、本質的な議論に到達することは、きわめて難しいことを痛感した。

また本論では言及することができなかったが、農業問題に深く通じ、かつ東北地方から排出された人びとの中に、植民地経営に関わった人物の少なくない事実については看過できないものがある。すなわち、台湾における後藤新平、新渡戸稲造、満州における石原莞爾らである。満蒙開拓をはじめとする植民地政策と日本の東北地方との関わりについては、稿を改めての重要な議論となる。

註

(1) 柳田国男『定本 柳田国男集第一巻』筑摩書房、一九六三年、

三〇頁。

- (2) 柳田の「日本固有の信仰」とは、村落共同体における氏神信仰や産土神に対するもので、それは「国民的精神生活」「国民的自覚」を支えているものであった。
- (3) メキシコならばトウモロコシ、フランスならばワインということになるであろうか。また、食物と Identity にまじわる海外の議論には Gallager, Catherine. *The Potato in the Material Imagination*; Smith, Anthony D. *National Identity*; Guy, Kolleen M. *Champagne and the Making of French Identity in the Belle Epoque* などがある。
- (4) 渡辺忠世『日本人と稲作文化』『日刊アーガム』No. 103、八一—一九一頁。
- (5) 小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社、一九九五年などがある。
- (6) Hobsbawm, Eric J., Ranger, Terrence O. *The Invention of Tradition*, 1983. エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジヤー『創られた伝統』紀伊國屋書店、一九九二年。
- (7) タカシ・フジタニ『天皇のページェント』NHK出版、一九九四年。
- (8) 大貫恵美子『コメの人類学』岩波書店、一九九五年、九頁。
- (9) 赤坂憲雄『象徴天皇という物語』筑摩書房、一九九〇年、一三〇—一頁。赤坂によれば、唐風、仏教、陰陽道、道教的なものごとごとく排除されることで、天皇の即位儀礼は純神道風に再編成されていた、と指摘されている。ここでは、中国をはじめとする「アジア的」要素を一掃し、欧米列強に対する脱亜「日本」を創出する意図があった。
- (10) 橋川文三『柳田国男論集成』作品社、二〇〇二年、伊藤幹治『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店、二〇〇二年、岩本田輝『柳田民俗学と天皇制』吉川弘文館、一九九二年、吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会、一九九七年、川田稔『柳田国男のえがいた日本』未来社、一九九八年、赤坂憲雄『海と精神史』小学館、二〇〇二年、岩本通弥『「民族」の認識と日本民俗学の形成』『近代日本の他者像と自画像』所収、柏書房、二〇〇一年、岡田精司『大嘗祭と新嘗』学生社、一九七九年、赤坂憲雄『王と天皇』筑摩書房、一九八八年、赤坂憲雄、前掲書など。
- (11) 柳田国男『新たな国学』『定本柳田国男集』第二五巻所収、筑摩書房、一九六四年。
- (12) 折口信夫『大嘗祭の本義』『折口信夫全集』第三巻所収、中央公論社、一九五四年。
- (13) Abercrombie, Nicolas, Hill, Stephan and Turner, Bryan S. *The Penguin Dictionary of Sociology*, 1988.
- (14) Gellner, Ernst. *Nations and Nationalism*, 1983. アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』岩波書店、二〇〇〇年、九二頁。
- (15) 茅原華山『新動中静観』東亜堂書房、一九一三年、二四—一八頁。
- (16) 夏目漱石『漱石文学全集』第四巻、集英社、一九七一年、七六—一三頁。
- (17) 夏目漱石、前掲書、三四—一頁。
- (18) ここでの外国米とは、中国、朝鮮のほかには英印、仏印およびタイからの輸入米である。
- (19) 望月誠編『時代の要求に伴ふ研究に基いて改良したる主食米炊爨調理新法』三葉堂、一九一二年。なお、一合に換算した米の価格は本書による外国米七合十二錢五厘、国内三等米一升二十

八銭から計算したものである。

- (20) 柳田国男『定本柳田国男集』第二四巻、筑摩書房、一九六三年、一六八―一九頁。
- (21) 小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社、一九九五年、二〇八頁。
- (22) 福沢諭吉『福沢諭吉全集』第八巻、岩波書店、一九五八年、二五七頁。
- (23) 半谷清寿『将来之東北』丸山舎書齋部、一九〇六年。
- (24) クラークで知られる、札幌農学校の農業教育は主に酪農であった。タンパク質は牛乳、炭水化物はジャガイモ、トウモロコシで摂取するという、西洋型の栄養設計がなされていた。
- (25) 東京帝大の植民政策学の教授で知られる、新渡戸稲造はその生涯を「開拓」の連続で過ごしたといっても過言ではない。南部藩士であった祖父の傳は、荒野だった三本木原の開発をしたことと知られている。また、天皇が東北巡幸の際に新渡戸家に立ち寄り、開発の功績を激励したことから、新渡戸は農学を志した。
- (26) 岩本由輝『東北開発二二〇年』刀水書房、一九九四年、七〇―一頁。
- (27) 相馬良子(黒光)は、仙台藩士の三女として仙台に生まれた。東北学院大学の創設者の一人であった押川方義をして「アンビシャス・ガール」と呼ばれた人物である。夫の愛蔵とともに新宿中村屋を開店し、頭山満ら黒龍会との接触のなかで、インドのラス・ビバリ・ポースをかくまったことでも知られている。
- (28) 田口卯吉のこと。
- (29) 半谷清寿／高橋富雄校訂『将来之東北』アイエ書店、一九六九年、六九―七〇頁。
- (30) 以下の文献にも指摘がある。河西英通『東北―つくられた異境―』中公新書、二〇〇一年。
- (31) 藤田五郎『藤田五郎著作集』第五巻、お茶の水書房、一九七〇年、及び、拙稿「会津農書をめぐる近代の語り」『福島県立博物館紀要』第二〇号、福島県立博物館、二〇〇六年、一二五―一五三頁。
- (32) 『貧しき人びとの群』は一九一六年九月号の『中央公論』に発表された。
- (33) 大石嘉一朗編『福島県の百年』山川出版、一九九二年、四四―八頁。
- (34) 中條百合子「貧しき人々の群」、『中央公論』一九一六年九月号、一〇一―二〇一頁。
- (35) ただし、その後福島県郡山市は、東北地方の玄関として中核都市へ変貌をとげている。現在の郡山市は、明治期の安積開拓の疎水整備を基盤として、さらに戦後の農地改良と寒冷地農業技術の進歩、工業化を経て形成された地方都市である。
- (36) 東畑精一『米』中央公論、一九三五年、二四六―七頁。
- (37) 東畑精一、前掲書、二四九頁。
- (38) 東畑精一ほか『朝鮮米穀経済論』日本學術振興会、一九三五年、三八〇頁。
- (39) 東畑精一、前掲書、二四八頁。
- (40) 官僚として日韓併合の準備にも関わった柳田は、三・一独立運動のあった一九一九年に辞職している。このことは、柳田の前期思想の根幹をなしていた「山人論」の放棄に大きく関わっている。小熊英二は「柳田は、大日本帝国のマイノリティである朝鮮やアイヌ、そして山人に対し自覚的でありながら、あえて彼らの関心を切り捨てた。以後の彼は、欧米の脅威にさらされ

る島国日本の常民を世界におけるマイノリティとして描き、日本独自の土着文化と統一を志向してゆくののである」と論じている。(小熊英二、前掲書、二二〇頁)

(41) 橋川文三『昭和維新試論』ちくま学芸文庫、二〇〇七年。

(42) 橋川文三、前掲書、七三頁。

(43) 山口弥一郎『東北の焼畑慣行』恒星閣、一九四四年。

(44) 『北方研究』第四集、綜合北方文化研究会、一九四一年。

(45) Hardt, Michael, Negri, Antonio. *Multitude*, 2004. マントニオ・

ネグリ、マイケル・ハート『マルチチチュード』NHK出版、二〇〇五年。

(46) 石田英一郎『日本文化論』筑摩書房、一九六九年、二二八頁。

(47) 正確には、戦前に減反政策が論議されたことがある。これは、

実際に政策として遂行されなかったが、植民地における朝鮮米、

台湾米が増産されたことで、米価が暴落し、内地農民に深刻な

打撃を与えることが懸念されたためであった。

(48) 吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社、一九六八年。

(やまうち あけみ) 博士前期課程